

岡本  
かの子  
美美子

宇野千代集

41

現代文学大系



岡本かの子  
林 芙美子  
宇野千代  
集

現代文学大系 41



筑摩書房

現代文学大系41 岡本かの子  
林 芙美子 宇野千代集

昭和四十年二月十日発行

著者 岡本かの子  
林 芙美子 宇野千代

発行者 古田晁

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八  
電話東京二九一―七六五一(代表)  
振替東京四一二三

装幀 真鍋博

本文用紙 三菱製紙株式会社  
表紙タロス 東洋タロス株式会社  
本文製版 株式会社精興社  
本文印刷 株式会社精興社  
製本 株式会社鈴木製本所

岡本かの子集 目次

巴里祭

五

東海道五十三次

三

老妓抄

四

林 芙美子集 目次

浮雲

三

宇野千代集 目次

色ざんげ

二七

おはん

二五

年譜

四六

人と文学

山本健吉 筆

口絵写真(宇野千代)提供  
文芸春秋社写真部

岡本かの子集

かみ子

ひたひたけははるまゝの陽が

あふにけのあふにけ

## 巴里祭

彼等自らうら淋しく追放人といつてゐる巴里幾年もの滯在外国人がある。初めはラテン区が彼等の巢窟だつたが、次にモンマルトルに移り、今ではモンパルナッスが中心地となつてゐる。

——六月三十日より前に巴里を去るのも阿呆、六月三十日より後に巴里に居残るのも阿呆。」

これは追放人等の口から口に伝へられてゐる諺である。つまり六月一ぱいまでは何かと言ひながら年中行事の催物が続き、まだ巴里に実がある。此の後は季節が海岸の避暑地に移つて巴里は殻になる。折角今年流行の夏帽子も冠つてその甲斐はない。彼等は伊達に就いても効果の無いことは互にいましめ合ふ。

淀島新吉は滞在邦人の中でも追放人の方である。だが自分でさう呼ぶことすらもう月並の嫌味を感じるくらゐ巴里の水になづんでしまつた。いはゆる「川向う」の流行の繁華区域は、皮膚にさへもうるさく感じるやうになつて、僅かばかりの家財を自動車で自分で運び、クルチウヌの橋を

渡り、妾町と言はれてゐるパッシー区のモツアルト街に引移つた。それも四年程前である。彼の借りた家の扉には隣の女装家ベッシエール夫人の家の金鎖草が丈の高い木蔓を分けて年々に黄色に咲く。

——今年の夏は十三日間おれは阿呆になる積りだ。」

新吉は訊かれる人があればさう答へた。諺を知つてゐる追放人仲間も成程彼が珍らしく七月十四日のキャートルズ・ジュイエの祭まで土地に居残るつもりだなと簡単に合点した。諺をまだ知らない同国人の留学生等には彼の方から單純に説明した。

——今年は一とつ巴里祭を見る積りです。」

しかし彼が十五年前に恋したまゝで逢へなかつたカテリイヌが此頃巴里の何処かに居ると噂に聞き、そのカテリイヌを、夏に居残る巴里人の殆ど全部が街へ出て騒ぐ巴里祭の混雑のなかで見付けようとする、彼の夢のやうな覺束ない計画などは誰にも言はなかつた。

新吉が日本へ若い妻を残して、此の都へ来たのは十六年前である。マロニエの花とはどれかと訊いて、街路樹の黒く茂つた葉の中に蠟燭を束ねて立てたやうな白いほのぼのとした花を指さされた。音に聞くシャン・ゼリゼーの通りが余りに広漠として何処に風流街の趣きがあるのか齒痒ゆく思へた。一箇月、食事附百フランで置いて貰つた家庭旅館から毎日地図を頼りにぼつ／＼要所を見物して歩いてゐるうちに新吉にとつては最初の巴里祭が来てしまつた。



町は軒並に旗と紐と提灯で飾られた。道の四辻には楽隊の飾屋台が出来、人々はそのまはりで見付け次第の相手を捉へて踊り狂つた。一曲済むまでは往來の人も車も立止まつて待つてゐた。新吉はさすが熱狂性の強い巴里人の祭だと感心したが、それと同時に自分もいつか誘ひ込まれはしないかと、胸をわく／＼させ踊りの渦のところは一々避けて遠くを通つた。

一年足らずのうちに新吉はすっかり巴里に馴染んでしまつた。巴里は遂に新吉に故郷東京を忘れさせ今日の追放人にするまで新吉を捉へた。家庭旅館の留学生臭い生活を離れて格安ホテルに暫らく自由を味つてみたり、エッフェル塔の影が屋根に落ちる静かなアバウトマンに、女中を一人使つた手堅い世帯持ちの真似を試みたり、新吉は巴里を横からも縦からも噛みはじめた。巴里で若し本当に生活に身を入れ出したら、生活それだけで日々の人生は使ひ尽される。その上職業とか勉強とかに振り分ける余力はない。新吉はすっかり巴里の髓に食ひ入つてモンマルトルの遊民になつた。次の年の巴里祭にも彼が留学の目的にして来た店頭裝飾の研究には何一つ手を染めてゐなかつた。その代り二人の女が生活にもつれて彼のこゝろを虜取つてゐた。一人は建築学校教授の娘カテリヌ。一人は遊び女のリサであつた。それからまだその頃は東京に残して来た若い妻も新吉のこゝろに残像をはつきりさせてゐた。かへつてそれが新吉の心にあるために、フランスの二人の女の浸み込

む下地が出来てゐたとも言へよう。

七月一日の午後四時新吉は隣の巴里一流服装家ベッシェールの小庭でお茶に招ばれてゐた。

——あなたに阿呆の第一日が来ましたわね。」

ベッシェール夫人は新吉の茶碗に紅茶をつぎながら言つた。彼女は中年を過ぎてゐて、もう自分が美人であることを何とも思はなくつてゐるやうな女だつた。この夫人にさういふ淡泊な処もあるので随分突飛な事や執拗い目に時時遇つても新吉は案外うるさく感じないで済んでゐる。

——まつたく七月に入つて巴里にゐると蒼空までが間が抜けたやうな気がしますね。」

彼女は漠然とした明るく寂しい巴里の空を一寸見上げて深い息をした。新吉は菓子フォークで頭を押へるとリキユール酒が銀紙へ甘い匂ひを立てゝ浸み出るサワラを弄びながら言つた。

——一つは競馬が終つてしまつたせゐでせうか。」

ロンシャンの大懸賞も、オートイユの障碍物競馬も先週で打ちどめになつた。

ベッシェール夫人は籐のテーブルの上へ置いた紅茶の瓶の口の下についてゐる雫止めのゴム蝶の曲つたのを、一寸直し、濡れた指を手首に挟んだハンカチで拭くと、その手はずつと伸して新吉の顎にかけて自分に真向きに向かせる。

——さあ、そんな他所事ばかり言つてないでもう仰しや

いな。なぜ今年は巴里祭に残つてゐるかつて言ふことを。あたしはどうもたゞの残り方ぢやないと睨んでゐるのよ。様子だつてふだんと違つていらつしやるわ。」

新吉は気が付いて見ると成程此のテールへ来て二十分ほど経つのに顔をうつ向けてばかりゐた。今更あわて、眼を二つ三つ瞬いて空や庭を見廻す。刈り込んだ芝生に紅白の夏花が刺繡のやうに盛上つてゐる。

——まるで子供ね。胡麻化すつもりでいらつしやる。」

夫人は狡さうに微笑しながら暫らく新吉の顔を見詰めた。この青年に恋して居るといふわけではない。然しこの青年がもし他の女に恋してゐるとでもなつたら嫉妬から彼女の気持ちの向きがどう変わるかも判らない。いびつな夫婦生活ばかりして来てたうとうそれも破れて仕舞つた此の老美人の悲運が他人の性愛生活にまで妙な干渉を始めるやうになつてゐた。

新吉は巴里の女に顎をつまゝれる事位には慣れ切つて居る。新吉は落着いて煙草ケースから一本取出して投げやり口に銜へた。夫人にも一本勧めて、それからライターで二人の煙草に火をつける。二人の口から吐く最初の煙のテンポが同じだつたので、それがをかしかつた。二人は笑つた。寛ろげられた気持ちに乗つて夫人はこんなことを言つた。

——どうしてもあなたと言はないなら、あたし嫌味なことを言ひますよ。あんたまさかあたしの為めに巴里にお残

りになるんぢやないでせうね。」

新吉は折角さう／＼と説明出来さうに思へてゐた今の一瞬の気持ちをこの言葉で閉ぢられてしまつた。もし夫人のこの悪ふざけの言葉に応答へする調子で自分の企てを話したら気持ちの筋道は飲み込ませられるかも知れないがその実質はとても覚束ない。それほど今度の思ひ立ちは情緒の肌理のこまかいものだ。いまはむしろ小説なら表題を告げて置くだけの方がこの女の親しみに酬いる最も好意ある方法だ。それで新吉は砂糖を入れ足すのを忘れてゐる甘味の薄い茶を一杯飲み乾すとかう言つた。

——マダム。僕はね。料理にしますとあまりに巴里の特別料理を食べ過ぎました。それでね。普通の定食料理が恋しくなつたんです。」

夫人の調子は案の定、今口に出した思ひ付きの一言に煽られてそれ者らしい飛躍を帯びて来た。

——ぢや。お祭りに出た女中さんでも引つかけ、世間並の若い衆になりたいとでもおつしやるの。」

——まさかね。でも今あなたの仰しやつた世間並には何とかして帰り度いのです。この儘ぢや全く僕は粹な片輪者ですからね。」

新吉のしんみりした物淋しさがあまり自然に感じられたので夫人の飛躍の調子がもとの地味にも落ち著けず、中途のところ鋭い浪を打つた。

——何にしても四年間金鎖草の花を分けて眺めさしてあ

げたあたしの好意に対しても万事打ち開けるものよ。いつでもいゝからね。」

そんなさばけたもの言ひをしながら、夫人はぐつと神経質になつて、新吉が帰らうと立上りかけるときに門番がわざわざ此所まで届けて来た日本からの手紙を見ると、差出人は誰だかとくどく訊いた。新吉はそれが国元の妻からのものだと、はつきり答へた。

新吉は部屋へ帰ると畳込みになつて昼はソファの代りをする隅のベッドの上被ひのアラビヤ模様の中へ仰向けにごろりと寝た。ベッドの右のところに火をつけた二本目の煙草を挟んだ左の手に右の手を手伝はせて妻からの手紙の封筒を切つた。いつもの通り用事だけが書いてあつた。それは市会議員の選挙に関するもので、その人選は新吉の実家も中に含んで魚市場全体の利害に影響があつた。

新吉の留守中両親も歿くなつたあとの店を一人で預つて、営業を続けてゐる妻のおみちに取つては永い間離れてゐてこころの繋りさへも覚束なく思へる新吉でもやつぱり頼みにせずつにはゐられなかつた。彼女はそれで故国の事情にはうとくなつてゐる夫から明確な指図は得られないのを承知でしじゆう用件だけ報じて来た。うつかり感情的のことを書いて、西洋へ行つてひらけた人になつてゐる夫に蔑まれはしないかといふ惧れもあつた。彼女は手紙の文体を新吉の返事に似通はせてだん／＼冷たく事務的にすることに努

めた。新吉もその方を悦んで兎も角彼女の手紙に一通り目を通すことだけはした。

しかし今度の手紙には新吉に見逃されぬものがあつた。それは文面の終ひの方に同じ淡々とした書き方ではあるがかういふことが書いてあつた。

わたくし、此頃髪の前髪を櫛で梳きますと毛並の割れの中に白いものが二筋三筋ぐらゐづつ光つて鏡にうつります。わたくしは何とも思ひません。然し強ひて人に見せるものでもなし、成るだけ櫛でふせて置くやうにしてをります。

新吉はめづらしく手紙の此の部分だけを偏執狂のやうに読み返し読み返すのをやめなかつた。おみちはいつまでも稚な顔の抜け切らぬ顔立ちの娘であつた。それ故にこそ親が貰つて呉れた妻ではあつたが、日本に居るときの新吉は随分とおみちを愛した。新吉は一人息子であつたので、妹といふものの親しみは始めから諦めてゐた。ところがおみちをめぐつて思ひがけなくも妻と共に妹を得た。洋行前に新吉はおみちに実家から肩揚げのついた着物を取寄させてしじゆう着させたものだつた。東京の下町の稲荷祭にあやめ団子を黒塗の盆に盛つて運ぶ彼女の姿が真実、妹といふ感じて新吉には眺められた。

巴里に馴染むにつけて新吉は故国の妻の平凡なをさな顔が物足らなく思ひ出されて来た。

特色に貪慾な巴里。彼女は朝から晩まで血眼になつて、

特<sup>キヤクテリイ</sup>性<sup>キヤクテリイ</sup>? 特<sup>キヤクテリイ</sup>性<sup>キヤクテリイ</sup>! と呼んでゐる。

妖婦、毒婦、嬌婦、曠婦——あらゆる型の女を鞭打つてその発達を極度まで追詰める。

ミスタンゲット、——ダミヤ、——ジヨセフ・カン・ペーカー、——ラケル・メレー。「聖母マリアがもし現代に生れてゐたら」とカジノ・ド・パリの興行主は言つた。「わたしは彼女を舞台へ誘惑することを遠慮しないだらう。」

始め、新吉は女を見るにつけ、どの女からおみちに似通ふところを見付けて一つは旅愁を慰めもし、一つは強い仏蘭西女の魅力に抵抗しようとしてゐた。だがやがて新吉に一たまりもなく甲を脱がして巴里女に有頂天にならした出来事があつた。新吉は建築学校教授の娘のカテリイヌに遇つた。

秋もなれば過ぎた頃である。教授のその部屋には電気ストロヴが桃色の四角い唇を開けてゐた。それでゐる窓の硝子戸は開け放されてゐた。うすい霧が月の光を含んで窓から部屋へ流れ込むと消えた。だいぶ馴染もついたらといふので新吉が通つて居た建築学校教授ファブレス氏が新しい生徒だけを自宅の晩餐に招いたのである。こんな古風な家が今でも巴里に残つてゐるかと思へるやうなラテン街の教授の家へ新吉は土産物の白絹一匹を抱へてはじめて行つて見た。学課に身を入れなかつたが、まだ此の時分新吉は籍を置いた学校の教室へ表面だけは正直に通つてゐた。

主婦は歿くなりでもしたと見え食事中も世話は娘のカテ

リイヌが焼いてゐた。新吉は此のカテリイヌのなかにもおみちを探さうとしてあべこべの違つた魅力で射すくめられた。カテリイヌのあどけなさはおみちの平凡なあどけなさは違つた特色の魅力となつて人にせまる。声は豎琴にでも合ひさうにすぎ透つてゐた。そして位をもちつゝ行届いたしこなしに、斜に向ひ合つた新吉は鏡に照らされるやうな眩しい気配ひを感じるばかりで、とてもカテリイヌの顔をいつまでも見つめてゐられなかつた。

食事が済んで客はサロンへ移つた。西洋慣れない新吉がろろろ食後のブランデーの盃をも挙げ得ないのを見て教授はしきりに話しかけて呉れた。日本の建築の話も少しは出た。だが酔の深くまはるにつれ教授は娘の自慢話を始めた。教授は想像される年齢よりもずつと若く見える性質なので二十三、四にもなるらしい大きなカテリイヌを娘と呼ぶのが不似合に見えた。ましてその娘の自慢の仕方はいくら酔の上と見ても日本人の新吉をはらはらさせた。

——誰でも此の娘を見てシャルムされたいものはないさうですよ。みんな、さう言ひますよ。君もさう思ひませんか。そしてよくこの娘は恋文を貰ふのです。みんな真剣なものです。近頃も学校の卒業生でエジプトへ研究に行つた男が二年間この娘に逢へないと思ふと淋しくて仕方がないと手紙をよこして言つて来ました。」

教授は娘を売りつけるつもりでこんなことを言ふのか、それとも西洋人は妻や娘の自慢を露骨にするとかねて人か

ら聴かされてゐたがこれは其の極端な現れなのか、新吉は返事に苦勞しながら、一方それとなく教授の様子を探つてゐた。教授は、したゝるやうな父親の慈愛の眼で娘の方を見やつたが再び芸術家によくある美の讚美に熱中してゐるときは決闘眼で新吉に迫つた。

——君は僕の言ふことをまだ疑つてるやうです。さうだ。この娘の魅力は膝へ抱へてみると一層よく判るのだ。わたしは父としてよく知つてゐる。君一つ抱いてみ給へ。その前から父と新吉とのはなしを困惑と好奇心で顔を赧らめながら聴いてゐたカテリイヌは父の振り向いた顔に強ひられて少し浮腰のまゝ、氣まり悪るげに左肩へ首をすぼめて、一たん逃腰になつたが、父親のがささない命令に急激な決心を極めた。彼女の一足跳ねたダンス足の左の靴の踵に、床を滑つて右の踵が追ひ迫り、あなやと思ふ間にひらりと新吉の膝の上に彼女は乗つかつた。新吉は柔いものの無限の重量を感じ、体は華やかな圧迫で却つて板のやうに硬直して了つた。

彼女は困惑から泌み出る自然の唐突さで言つた。

——日本の娘さんは悲しさうに男の方にお逢ひなさるさうです。ね。」

かういふ場合に同席する西洋人等の態度も新吉には珍らしかつた。そこにはルーミアニアの男とカナダの男との他に五人の若いフランス人がゐたが彼等は揃つて、さも好もしいものを見るといふ幸福な顔をして二人の組合せ像を眺め

た。

その夜新吉の膝に加へられたカテリイヌの柔い重圧が新吉のメラニコリーに深く沁み込んで仕舞つたのを新吉はいましましく思ひながら、まぼろしのやうにその夜教授の部屋の窓から眺めた月光を含む霧の中からサンミッシェル街の灯影を思ひ泛べて、秋の深まり行く巴里の巷を幸福と懊惱に乱れ乍らさまよひ歩いた。かうしたカテリイヌと二度会ふ機会を待つてゐるうちに新吉は思ひがけなく遊び女のリスと逢つて仕舞つた。

新吉は寝椅子の上でおみちの手紙を状袋にしまつた。それから手を伸して貴金屬商アンドレの店頭裝飾写真の入つてゐる額縁のうしろへ挟んだ。十年以上も無視してゐたおみちが急に蘇つて来たのはどうしたわけだらうか。たつた二三行の手紙の文句で日本へ帰る思ひが燃え立つたのはどうしたわけだらうか。おみちのあのをさな顔が其のまゝでちらほら白髪が額にほつれて来た。此の報告が巴里の生活で情感を磨き減らして無感覚のまゝ、冴え返つてゐる新吉の心に可なりのさびしみを呼び起した。おみちがたゞ年老いて行くことだけでは憐れとも思はない。あの眼も口も篋で一すくひづつ平たい丸みから土をすくつただけで出来上つてゐる永遠に滑らかな人形のやうな顔。それに時が爪をかけるはじめたのだ。さまをみるがいゝ。滑稽だ。残忍な料人の感情だ。妻に侮辱と嘲笑とに値する特色を發見出来るや

うになつて始めて慻々たる憐れみと愛とが蘇るといふのだ。淋しくしみんと妻を抱きしめる気持ちになれたのだ。何たる没情。何たる偏奇。新らしい陶器を買つても、それを壊して継目を合せて、そこに金のとめ鏝が百足の足のやうに並んで光らねば、その陶器が自分の所有になつた気がしないといつたあの猶太人の蒐集家サムエルと同じものを新吉は自分に発見して怖しくなつた。あのとろんとして眼窩の中で釣がゆるんだらしく、いびつにびよくびよく動いてゐる大きな凸眼、色素の薄くなつた空色の瞳は黄ろい白眼に流れ散つてその上に幾条も糸蚯蚓のやうな血管が浮き出てる。あのサムエルの眼はやがて自分の眼であるに違ひない。

部屋の中の家具に塗つてあるニスが濡れ色になつて来て、銀色の金具は冷たく曇つた。もうたそがれだ。新吉はいつもの生理的な不安な気持ちに襲はれ胃囊を圧へながら寝椅子から下りた。早くアペリチーフを飲みたいものだ。八角テーブルの上に置いてある唇草の花が気になつて新吉はその厚い花卉を指で挟んでテーブルの周囲を揃はない歩調でぶらぶら歩いた。窓から見える堀の金鎖草の蔓の一むらの茂みが初夏の夕暮の空に蓬髪のやうに乱れ、その暗い陰の隙から、さつき茶を呑んだ隣のベッシェル夫人の庭の黄ろい草が下方に小さく覗かれる。あれから夫人はまた多少のヒステリーを起し、いつもよくやるやうにピカ／＼光る裁縫針の冷たい腹を頬に当て、昔訣れた幾人もの夫の

面影を胸の中に取り出し愛憎交々の追憶を調べ直してゐるのではあるまいか。夫人の最後の夫ジョルジュには夫人はまだ未練があるやうだ。そのせむかジョルジュの話をする時に夫人は一番新吉に粘りつく。

新吉は窓に近く寄つてみた。雲一つなく暮れて行く空を刺してゐた黒い鉄骨のエッフェル塔は余りににべも無い。新吉はくるりと向き直つて部屋の中を見た。友達のフェルナンが設計して呉れたモダニズムの室内装飾具は素つ氣ないマホガニーの荒削りの木地と白真鍮の鋭い角が漂ふ闇に知らん顔をして冷淡そのものを見るやうだ。フェルナンは若くて死んだアルサス人だ。夭逝した天才の仕事には何処か寂しいエゴイズムが閃めいてゐるものだ。

新吉はこの部屋へ今にも訪ねて来る約束のリサに会い度くなつてしまつた。新吉は一応内懐の紙入れを調べて帽子を冠りドアを開け放して来てから、椅子に腰掛けてリサを待ち受けた。いら／＼した貧乏ゆすりが出た。さうしながらも新吉は残酷と思ひながらしきりにおみちのをさな顔に白髪を生えた図を想像した。

家鴨料理のツール・ダルチャンでゆつくりした晚餐をとつた後、新吉とリサとは直ぐ前のセーヌ河の河岸に沿つて河下へ歩き出した。酔つた新吉をリサは小児のやうにいたはつてゐた。

リサは健康で牛のやうな女だつた。新吉が彼女に逢つてから十年近くも経つのに彼女は相変らず遊び女を勤めてゐる

る。リサに言はせると遊び女は母性的な彼女の性格には一番相応しい職業だといつてゐる。彼女は巴里へ来たての外国人の男たちを何人ともなく巴里に馴染むまでに仕立て上げる。男達はそれまで彼女の厄介になると彼女から離れる。そしてつと気の利いた面白い女へ移る。然し彼女はすこしも悪びれず男を離してやつて、また次の初心な外国人を探し出す。離れてしまつた男たちも時が経つとやつぱり彼女に懐しみを蘇へらせて来て彼女と交際ふやうになる。そのときは彼女をみんなは「をばさん」と呼んでゐる。彼女もそのときはをばさんの立前になつていろいろ親切に世話をやくのであつた。

河堤の古本屋の箱屋台はすつかり黒い蓋をしめて、その背後に梢を見せてゐる河岸の菩提樹の夕闇を細かく刻んだ葉は河上から風が来ると、飛び立つ遠い群鳥のやうに白い葉裏を見せて、ずつと河下まで風の筋通りにざわめきを見せて行く。ルーブル博物館を中心に肩を高低させてゐる向う岸の建物の影は立昇る河霧にうつすり淡色の夕化粧を見せて空に美しい輪郭を際立たしてゐる女の横顔のやうだ。その空はまた一面に紫薔薇色の焰を挙げて深まらうとしてゐる。闇を掻き乱さうとしてゐる。黄、赤、青のネオンサインは街の中空へ「夏はドゥヴャルへこそ」とアルファベットを綴つてゐる。

——まあお聞き……。といふわけだね。さつきから言つ

たやうにね。巴里祭にはあたしが見つけてあげたその娘をぜひ一緒に連れてお歩きなさい。」

リサはがつちりした腕で新吉の腕を自分の脇腹へ挟みつけてながら言つた。新吉のステッキも夏手袋も自分が引受けて持つてゐる。

——……………。

——いくら処女心が恋しいからといつて、その昔のカテリイヌの面影を探しながらお祭りを見て歩かうなんて、そりやあんまり子供っぽい詩よ。そんなことであんなのやうなすれつからしに初心な気持ちの芽が二度と生ええると思つて。」

新吉の酔つて悪く澄んだ頭をアレギザンドル橋のいかつい装飾とエツフェル塔の太い股を上げた脚柱とが鈍重に圧迫する。新吉はそれらを見ないやうに、眼を伏せて言つた。

——おい後生だから、もう一音階低い調子で話して呉れないか。その調子ぢや、たとへ成程とうなづきたいことも先に反感が起つてしまふよ。」

——あら。そんなにひどい神経になつてゐるの。まるで死ぬ前のフェルナンのやうだわ。」

リサは闇の中に顔を近づけて覗き込みながら言つた。さも哀れに堪へないやうに中年近い女の薄髭の生えた、厚身の唇が新吉の頬に迫つて来たので新吉は顔を避けた。

——いよ／＼もつてあたしの探したあの娘をあなたのものにするをお勧めするわ。何事も女で育つて行く巴里

では、たとへ女に中毒したのも、それを癒すにはやつぱり女よ。もしあたしがもう七ツ八ツ若かつたらこんな手間暇は取らせませんのにな。」

リサは今しがた新吉に意見したのとはあべこべなことを平気で言つた。二人はアレギザンドル橋を渡つた。春秋に展覧会の開かれるグランパレーの入口は真黒く閉つてゐて、プチパレーの方に波蘭の工芸品展覧会の雪の山を描いたポスターが白い窓のやうに几帳面な間隔を置いて貼られてある。娑婆さばとした街路樹がかすかな露気を額にさしかけ、その下をランデ・ヴウの男女が燕のやうに閃いてすれ違ふ。新吉は七八年前、五色の野獸派の化粧をしてモンマルトルのペットだつたりリサを想ひ泛うべた。がつちりした彼女の顔立ちにそれがよく似合つた。当時彼女はあるカフェーで新吉からカテリイヌに対する悩みを聴いたとき新吉の鼻をつまんで言つた。

——そんな恋はありきたりよ。愛なんかちつとも無い二人同志の間で技巧で恋を生んで行くのが新しい時代の恋愛よ。」

彼女が裸に矢飛白やがすりの金泥こんでいを塗つて、ラバン・ア・ジルの酒場で踊り狂つたのは新吉の逢つた二回目の巴里祭パリ祭の夜であつた。彼女は其の後だん／＼奇矯きこうな態度を剃はいで持ち前の母性的の素質を現して来たが、折角同棲した若いフェルナンに死なれてから男に対して全く憐れみ一方の女となつた。

——君もあの時分は元氣だつたなあ。」

さう言ふと流石さすがに彼女も悵然ちやうぜんとしたらしい様子のまゝしばらく黙つた。二人は並木のシャン・ゼリゼエまで出たが一筋の道の両はづれに一方はコンコルドの広場に電飾を浴びて水晶の花さしのやうに光つてゐる噴水を眺め、首くびを廻めぐらして凱旋門通りの鱗うろこのやうに立ち重なる宵の人出を見ると軽い調子になつて彼女は言つた。

——無理のやうだがさうすると、あんた決めておしまひなさいね。きつと結果がいゝから。そしたらあたしその娘を巴里祭の日に、まつたく自然のやうにあなたに遇はせてあげますから。あなたは只その日お祭りを楽しむ町の青年になつて、朝自分の家を出なさるだけでいゝのよ。」

そこでステッキと手袋を新吉に押付けるとリサは簡単に、

——ポン、ソワール。」

と行きかけた。新吉が、

——ちよいと待つて呉れ給へ。国元の妻のことに就いてすこし話したいんだが。」

とあわてゝ言ふと、リサは逞たくまましい腕を闇の中に振つて指先を鳴らした。

——もう、あんたのことはみなその娘に譲りましたよ。」

リサは男のやうに体を振り乍ら行つて仕舞つた。

明日の祭の用意に新吉も人並に表通りの窓枠へシナ提灯しなぢちんを釣り下げたり、飾紐で綾を取つたりしてゐると、下の舗



石からベッシェール夫人が呼んだ。

——結構。結構。巴里祭万歳。」

新吉は手を挙げて挨拶する。

——あなたのところに綺麗な国旗がありまして。若しなれば——。」

さう言ひさして夫人は門の中へ消えたが、やがて階段を上つて来て部屋の戸をノックする。

新吉が開けてやると、しとやかに入つて来て、

——剩つたのがありますから貸してあげますよ。」

それから屈託さうに体をよぢつて椅子にかけ、八角テールの銅版刷りをまさぐる。壁の嵌め込み棚の中の和蘭皿の淡い釉薬を見る。箔押ししの芭蕉布のカーテンを見る。だが瞳を移すその途中に、きつと、窓に身をかがまして覚束なく働いてゐる新吉の様子を油断なく窺つてゐる。何か親密な話を切り出す機会を捉へようとしてゐるらしい。新吉はどたと窓から飛下りて掌に握つたぢゆうぢゆうといふ嗚声を夫人の鼻先に差出した。

——小さい雀の子。」

夫人は邪魔もののやうに三角の口を開けた子雀の毛の一つまみを握り取つて煙草の吸殻入れの壺の中へ投げ込んでしまつた。無雑作に銅版刷で蓋をする。

——おちついて、あなた、そこに暫らく坐つて下さらない。」

新吉はちよつと左肩をよぢつて不平の表情をしてみたが、名優サシャ・ギトリーの早口なオペレッットの台詞を真似て、

——マダムの言ひつけとあらば、なんのいなやを申しませうや。茨の椅子へなりと。」

と言つてきよとんと其所へ坐つた。

——いよ／＼明日巴里祭だといふので、いやにはしやいでいらつしやるね。さぞお楽しみでせうね。」

新吉はぎくつとした。情事に就いては彼女自身はもうすつかり投げてゐるのに他人の情事に対する関心はまたあまりに執拗だ。それにリサと夫人とは古い知り合ひだから、ひよつとしたらリサの自分に対する明日のたくらみでも感づいたのではないか。新吉は油断をせずにとぼけた。

——あしたは世間並の青年になつて手当り次第巴里中を踊り抜くつもりですよ。」

——そりや楽しみですね。国元の奥様のことを考へながら、その悩みをお忘れになりたい為めにね。」

鸚鵡返しにやうに夫人はかう言つた。新吉は的が外れたと思つた。自分の今の心を探つて見るに、国元の妻からの手紙が来て以来、其のをさな顔に白髪のはつれかゝつた面影が憐れに感じ出されたには違ひない。然しそれと同時に今は明日はじめて逢ふ未知の娘、リサの世話して呉れる乙女にもまた憐れを催してゐる。自分のやうに偏奇な風流餓鬼の相手になつて自分から健康な愛情の芽を二度と吹かしで呉れようとする無垢な少女。だがそれよりも新吉が一番